（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　吉田　寛

ドイツという国は、しばしば音楽の「本場」として言及され、「音楽の国」などと呼ばれることも多い。本論文はそのような自己表象がドイツにおいてどのようにして成立したか、それがその後の音楽史像をどのように規定し、またドイツ人のアイデンティティ形成にどのように関わってきたのかをめぐる言説史研究である。今日一般的になっているドイツ音楽表象の原型が成立するのは 19 世紀になってのことであるが、本論文はそれに先立つ 17 世紀のアタナシウス・キルヒャーの音楽論や 18 世紀のイタリア音楽とフランス音楽の論争のドイツにおける受容といった「前史」の部分も含め、ドイツの音楽思想に関わるきわめて浩瀚な文献を丹念に調査し、それらをドイツ表象という一貫した視点から位置づけ直し、それらの言説の系譜や変遷を再構成することを試みた労作である。

これまで純粋に美学や芸術論の問題圏で論じられてきた「ドイツ音楽」の問題を政治史的な視点もふまえて捉え直そうとする動きは近年急速に盛んになってきており、アップルゲートとポッターの編んだ論集 “Music and German National Identity”(2002) をはじめ、様々な成果が出はじめているが、いまだ散発的で、かつそれらの議論の多くが 19 世紀以降に集中しており、本論文のように「前史」部分も含めて「ドイツ音楽」表象の歴史を包括的に取り扱ったものは欧米にも例がない。その点だけでも画期的な業績といいうるだろう。

取り上げられている個々の対象には、これまでに個別研究の蓄積があるものも少なくないが、本論文はそれらを単に歴史的コンテクストに沿って整理したことをはるかにこえて、個別研究としても評価できるようなポイントを随所に含んでいる。「ドイツ的」なものの表象という一貫した視点からの通時的な考察を通して、個々の対象自体に対してもこれまでにない新しい見方が可能になったケースが数多く認められる。

中でも、従来の研究の中では絶対音楽といった概念と結びつけてもっぱら純粋に美学的な問題として議論されてきた 19 世紀の「ドイツ音楽」表象のあり方が当時のドイツの政治的状況との関わりという観点から分析され、それが単に当時の政治的状況を反映しているという以上に、音楽がこの時代の思想や歴史記述の中に織り込まれ、近代国家としてのドイツのアイデンティティ形成過程で中核としての役割を果たしてきた側面をもつことが明らかにされたことは特筆すべき成果である。このことによって本論は音楽研究に新たな知見をもたらしたのみならず、ドイツ史やドイツ思想研究にも一石を投じるものとなりえよう。また、この時期、ドイツ内部でも北ドイツと南ドイツとの間に「ドイツ的なもの」をめぐる対立構図が存在しており、それが音楽美学上の論争の背景ともなっていたことが明らかにされたことも重要な成果である。そのような見方は、この種の論争をも一枚岩的な「音楽の国ドイツ」の表象のうちに包摂してすべてを片づけようとしてきたきらいのある従来のドイツ音楽観に対してその見直しを強く迫るものとなっている。

本論文は 400 字換算にして 2000 枚におよぶ大部の論文であるが、テーマ設定自体の大きさゆえ、論じる余地の残されている問題も多い。また、多様な問題を一つの筋道にそってやや一方向的にまとめすぎた面もなしとはしないが、この大きなテーマ設定にこたえて本論文の提示した全体像の大きさや個々の知見の豊穣さに照らすならば、その欠点はほとんど取るに足らないものであり、著者が今後の研究で十分に克服できるものと判断できる。

以上の理由により、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。